

「いのちの停車場」著者：南 杏子（みなみ きょうこ）

4月の読書案内に続き著者「南杏子氏」の第四作目の「いのちの停車場」である。今回も在宅医療をテーマとする内容で、終末医療を正面からとらえた作品である。小説家でもあり、医師でもある作者の強味から、内容には臨場感があり、その現場に自然に引き込まれ、他人事とは思えない共感できる物語である。

東京の城北医科大学病院の副センター長である白石咲和子（62歳）が主人公。ある夜勤の日の大規模交通事故の患者を許容以上に受け入れ医師免許のない医学生野呂聖二が点滴をしたことが問題となり、責任を取って辞めた。そして故郷の金沢に帰り、在宅専門の「まほろば診療所」を手伝うこととなった。所長は2歳年上の幼馴染の仙川徹。事務スタッフの玉置亮子、看護師の星野麻世、それとあとで手伝うこととなった医学生の野呂聖二。

【第一章】 在宅での老々介護の問題。夫の並木徳三郎がパーキンソン病の妻のシズ子（86歳）の介護をしているが、デーサービスなどお金がかかることは全て断って一人で世話をしている。当然十分な世話ができない状況にある。このような患者を在宅医療で支援する内容である。

妻のシズ子は死期が近づいているが、夫は妻の最後をみとる覚悟ができていない。咲和子は、静かに妻の看取りができるよう徳三郎に、分かるように説明した。そして、夫の徳三郎は、あわてることなくシズをみとることができたのである。看護する側も覚悟が必要なのである。

【第二章】 在宅医療でできる最先端の医療を探る内容である。患者は、金沢を代表するIT企業の社長江ノ原一誠（40歳）でラグビーの試合でタックルされ脊髄損傷という不幸な事故で首から下が不随に。

江ノ原は幹細胞移植治療を要求した。咲和子には技術を持った医師を見出しそのサポート役を要求した。江ノ原は咲和子に「何のために生きるのか。僕は社会に対して自分がどこまでやれるのか追い詰めたいただけなんです。起業家として社会貢献を続けるために、幹細胞治療を受けてみたいと思った。もし頭が動かなくなったり、誰かの役に立てない状況になれば、もう命はいりません」ときっぱり言い切った。

【第三章】 ゴミ屋敷の中で生活している大槻千代（78歳）高血圧と糖尿患者。夫婦でカフェを経営しながら母の面倒を診ている娘の小崎尚子。あるきっかけで、母親が娘の家のもらい湯をすることとなり、母親との間に心が通うようになり、バスに一人で乗って娘の家に来るまでになった。気持ちの問題なのである。

【第四章】 終末医療を迎えた患者とその妻の再生。すい臓癌末期の患者宮嶋一義（57歳）厚生労働省の高級官僚。金沢の空き家の実家に帰り終末医療を希望。妻の友里恵は、若くして夫の最後を看取る役割。徐々に悪くなる夫の姿を見ている妻は、心身ともに疲れているのを見て、看護師の麻世は実家の旅館で一時休息（2泊）させることを進め、旅館のもてなしと現実から離れた世界で、心の安定を得ることができ、最後の夫の看取りを穏やかに迎えることができた。看護者の心のケアも必要なのである。

【第五章】 小児がんに侵され死期を間近に控えた女兒と両親の悔いのない日々を描く。患者は若林萌（6歳）腎腫瘍で肝転移もありステージ4の末期の状態。もはや手術もできない段階で、余命数週間。

両親は新たな治療を要求し、あきらめきれない。在宅で緩和ケア治療をする方針。野呂は萌とすぐに心が通じ合うようになった。萌が野呂のことをお兄ちゃんの先生と慕い、ある時「海に行きたい」と言いた。野呂が理由を尋ねると「海の神様をお願いしたいの。今度は本物の人魚に生まれさせてくださいって」と答えた。それは、アンデルセンの童話集に出てくる話で、自分の命が短いことを悟り、次なる再生を願った結果だと咲和子は思った。行かせてやりたいが無理なことだと思いつき亮子が、千里浜のなぎさドライブウェイを思い出し、両親に説明し実行することとなった。波うちぎわまで車でいき、父親が萌の体を抱き上げ海に入り、足を膝までつかることができた。「萌ね、癌になっちゃってごめんね」「萌ね、人魚になっても、パパとママの子になりたい」海辺での時間はあっという間に過ぎていった。海に出かけた三日後の朝、萌は亡くなった。

【第六章】 咲和子自身の父親の最後を看取る患者側としての在宅医療である。父親は骨折をきっかけに、誤嚥性肺炎など次々に新しい病気に見舞われ衰弱が進み元気がなくなっていった。

脳梗塞後の激しい疼痛症状に悩まされ日々と戦っていた（神経障害性疼痛）父はその痛みから解放され安らかに死にたいという思い自宅に帰ることを決心した。咲和子も休暇を取って父親の看病に専念することとした。

父がモルヒネで眠っている間に、咲和子を励ます会がバーSTATIONに向かった。スタッフは患者のリクエストに応じる気持ちの集合でできる医療、最後の日までいかにその人らしく生きるのかそうした毎日を支える存在になろうと皆がそれぞれ考えていることが分かった。

励ます会の翌日父は咲和子に「お父さんを楽にさせてくれ」と懇願された。大量の鎮静剤による「積極的安楽死を頼む」と言われた。医者の手によって死期を早める措置である。日本では安楽死で担当医師が無罪になったケースはない。

咲和子は、仙川に相談した。そして自宅に仙川をよんで立会人とした。後のため、野呂は父の希望でビデオカメラをセットした。点滴のセットをつなぎこんだ。後は点滴をオンにすればよいだけとなった。

しかし、父はいつまでたっても点滴のつまみに手を伸ばそうとしなかった。ベッドから父の手がだらりと垂れ下がった。脈をみた。既に父は亡くなっていた。

咲和子は、父に大量の鎮静剤を調剤している一連の映像、さらに父の残した書簡や文書は全てそのまま第三者に委ねる決心を固めている。咲和子の覚悟の支えとなっているのは自分の行為を世に問うことで希望を見出す人が必ずいるはずだという確信だった。